

日本人学生を対象とした短期海外派遣プログラムの課題と展望 — 東京外国語大学ショートビジットプログラムを事例として —

新居純子・岡田昭人

はじめに

平成 23 年、平成 24 年度に、文部科学省は「留学生交流支援制度（ショートステイ・ショートビジット：以下 SV とする）」を導入した。本制度は、日本の大学、大学院、短期大学、高等専門学校第 4 年次以上、専修学校を対象とした、3 か月未満の留学生受け入れ、ならびに海外派遣プログラムに参加する日本人学生のための奨学金制度である。

SV は平成 25 年度に廃止され、「留学生交流支援制度（短期受け入れ・短期派遣）」に統合される形で継続され、現在に至っている。この制度は、短期派遣 短期研究・研修型とされ、8 日以上 1 年以内の期間で、該当学生を受け入れ／派遣する制度である。

本稿は、新しく導入された SV の現状を東京外国語大学の事例を分析することによって明らかにする。その上で、本稿は将来的に SV を拡充するためにはどのような課題があるのか、また希望する学生全員を派遣することを可能にするためにはいかなる制度設計が必要であるのか、を分析・示唆するものである。

1. 東京外国語大学の留学生交流支援制度（短期派遣を中心に）

本節では、東京外国語大学の実施する SV（「Freshman Abroad Program — TUFUS から世界へ」および「問題追求型夏期・春期学生派遣プログラム」：以下 TUFUS-SV とする）の概要を説明する。

・ TUFUS-SV の概要と目的

TUFUS-SV は、学部生を対象とし、主に夏季休暇期間に世界各地の本学協定校へ派遣するプログラムである。（協定校の学事暦の関係から、一部の派遣は、春休みに実施する）。平成 26 年度の派遣校は 23 か国 1 地域（中国、台湾、韓国、モンゴル、マレーシア、タイ、ベトナム、ラオス、ドイツ、オーストリア、ポルトガル、スペイン、ロシア、スイス、フランス、イタリア、アイルランド、イギリス、チェコ、トルコ、カナダ、アメリカ合衆国、ニュージーランド、オーストラリア、ミャンマー、スロヴェニア）の 44 大学、学べる言語は 17 言語に上る。

世界各地の協定校が開講する 1～2 か月のプログラムに学生を派遣し、主として言語と文化の授業を履修させる。学部 1 年次の学生にとっては大学入学から 3 か月間を経た後、専攻する言語を集中的に学んだ段階での海外体験となるため、その効果は語学運用能力の

向上として期待される。

また、言語の習得だけではなく、専門的に学ぶ地域に留学し、現地の人々と触れ合う機会を得ることは、さらなる学習の動機づけとなろう。派遣の成果は、留学先の大学の成績と修了書によって確認され、単位認定される。

・ TUFSS-SV の達成目標

TUFSS-SV は、次の 3 点を達成目標とする。

1. 東外大で教授されるすべての言語を現地で学ぶ機会が得られるようにすることを将来の目標にし、現時点で最多地点への派遣を実現する。
2. 言語研修を中心としつつも、文化や社会を学ぶことのできるプログラムを提供する。
3. 学生が主体的に選択し、自らの目的をもって挑むプログラムとする。

TUFSS-SV に派遣される学部 1 年次の学生は、大学入学以来、専門とする初修言語を週 5 回受講する。各言語の 1 学期の達成目標をクリアしていることがサマースクール参加の条件となるが、これは、概ね、CEFR-J の基準による A1.0 レベルに相当する (CEFR-J はヨーロッパ言語共通参照枠をもとにつくられた、語学能力測定の目安)。英語圏のサマースクールについては、各大学の要件に応じ、TOEFL iBT 80 点以上が要件となる。

・ TUFSS-SV のプログラム計画

世界の 23 カ国の 44 の協定校の行うサマープログラム (一部、スプリングプログラム) へ学生を派遣する本プログラムは、次の特徴を持つ。

- ① 派遣学生は学前に、詳細な「留学計画」を提出させ留学の目的を深く考え、それを踏まえ自ら留学準備を行わせる。
- ② 協定校の提供するプログラムは、語学運用能力を向上させるものである。
- ③ 留学による成果を、東外大の単位として認定できる
- ④ 現地に滞在し、地域文化や地域社会について知識を得、地域に対する理解を深めることができる
- ⑤ 帰国後は体験報告書を作成させ、「留学前の課題設定と自己評価」「今後の課題」を文章化することにより、留学の成果を自ら確認できる

以上の特徴から、TUFSS-SV は派遣以後の勉学に、より積極的に取り組む意欲を育むプログラムとなるようデザインされている。例年、TUFSS-SV 留学を体験した学生は、その後 1 年間の派遣留学へと進むケースが多く、本プログラムが学習意欲を触発していることが確認できる。

2. TUFSS-SV プログラムの特徴

上記のような計画で進められている TUFSS-SV であるが、本節では、その特徴についてさらに詳しく述べる。

(1) プログラムの開催国が多岐にわたる

各国言語コース、英語コース、英語で学ぶ総合型コースの3つのカテゴリーに分けられたプログラムであるが、開催国は23か国、学べる言語は17言語にのぼる。このプログラムの多様さは、27の専攻語がある本学ならではの特色と言える。

(2) 協定校が開催している既存のプログラムに参加する

一部のプログラムを除き、一般に広く募集されているプログラムに参加することが基本となっている。これは、日本人学生が少ない地域への留学を希望する学生が多く、様々な国からの留学生とともに学べる環境が期待できるためである。一部ミャンマーやラオスなど、留学自体が難しいと思われる地域への留学に関しては、教員が深くかかわり、本学のための独自プログラムを構築している。また、長年行ってきた独自型のプログラムがSVに入った例もある（タイ、ベトナム、トルコ）。

(3) 申請は学生中心で行う

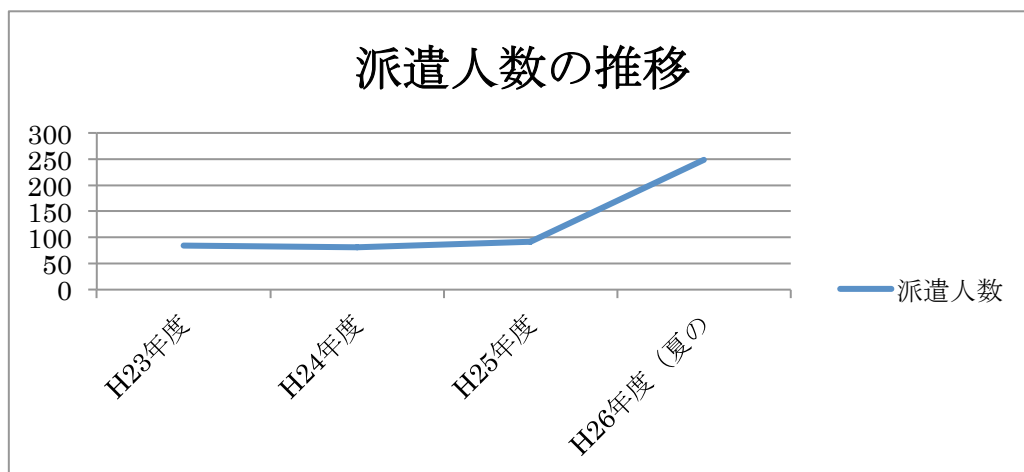
一部の全員参加型プログラム等を除き、プログラムへの参加申請は学生が主体的に行うよう促している。本学では学生の英語力が平均して高いため、留学先を選ぶ→申請をするという留学前のプロセスを自主的に行うことにより、実践を通じた語学力の育成も目標としている。留学先の選択に必要な情報を取捨選択し、読みこなす力を育み、申請書に記入をし、留学に必要な手続きを自主的に進めた上で留学を現実のものとすることで、より達成感のある留学となることが期待される。留学前のプロセスで質問や問題がある場合は留学支援室で対応しており、同支援室では、必要に応じて申請書の書き方のワークショップを行ったり、オリエンテーションやビザ説明会を行うなどして学生をサポートしている。

3. TUFSSV 留学者数の推移

本学では、平成23年度から、春と夏の長期休暇中に行われる各国でのプログラムに学生を派遣しているが、派遣人数の推移は以下のとおりである。平成26年度については、2015年6月現在、夏のプログラムへの登録人数のみが明らかであるため、春の人数は追加されていない。

これまでのプログラム派遣人数の推移

年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度(夏のみ)
派遣(登録)人数	84	81	92	248



グラフからわかるように、派遣人数は平成 23 年度から 25 年度はほぼ横ばい状態にあるが、平成 26 年度（夏のみ）の登録人数が急激に伸びている。
次項では、TUFSS-SV 参加者が急激に増えた理由について考察する。

4. 学生の TUFSS-SV に関する意識調査

TUFSS-SV 制度を充実させるため、平成 25 年 10 月、本学の 1, 2 年生を対象に、ショートビジットの希望と希望留学先についてのアンケートを行った。結果の概要は以下のとおりである。

1 年生について

本学の 1 年生 807 名のうち、85%にあたる 683 名より回答を得た。

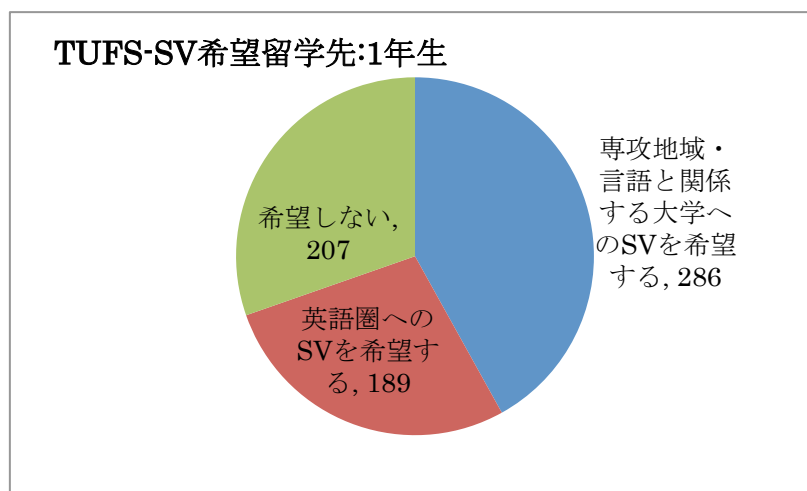
調査対象の概要

学生の TUFSS-SV に関する意識調査における、1 年生の学部別人数は以下の通り。

学部	人数
言語文化学部	356
国際社会学部	327
総計	683

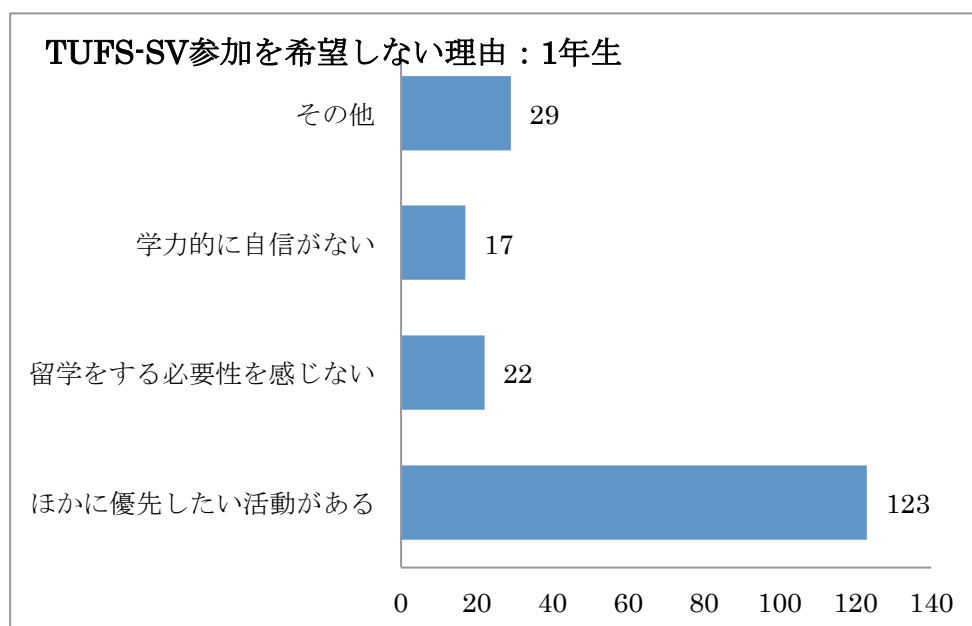
TUFSS-SV 希望留学先について

TUFSS-SV 留学を希望する学生は 475 名で、全体の 69%を占めている。そのうち、専攻地域・言語と関係する大学への留学を希望する学生は 286 名で TUFSS-SV 留学を希望する学生のうち 60%、英語圏への留学を希望する学生は 189 名で TUFSS-SV 留学を希望する学生の 40%であった。



TUFS-SV 参加を希望しない理由について

TUFS-SV 留学を希望しない学生は 207 名いたが、その理由として半数以上の学生が挙げているのが「ほかに優先したい活動がある (123 名)」とのことであった。その他、「留学をする必要性を感じない (22 名)」「学力的に自信がない (17 名)」との理由が続いた。



2年生について

全学生 869 名中、74%にあたる 647 名より回答を得た。

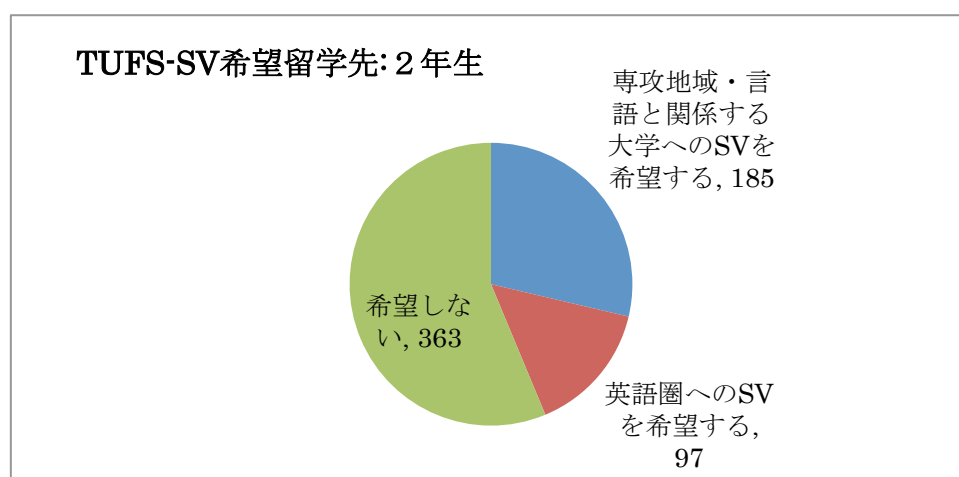
調査対象の概要

学生の TUFS-SV に関する意識調査において、2 年生の学部別人数は以下の通り。

学部	学生数
外国語	41
言語文化	321
国際社会	285
合計	647

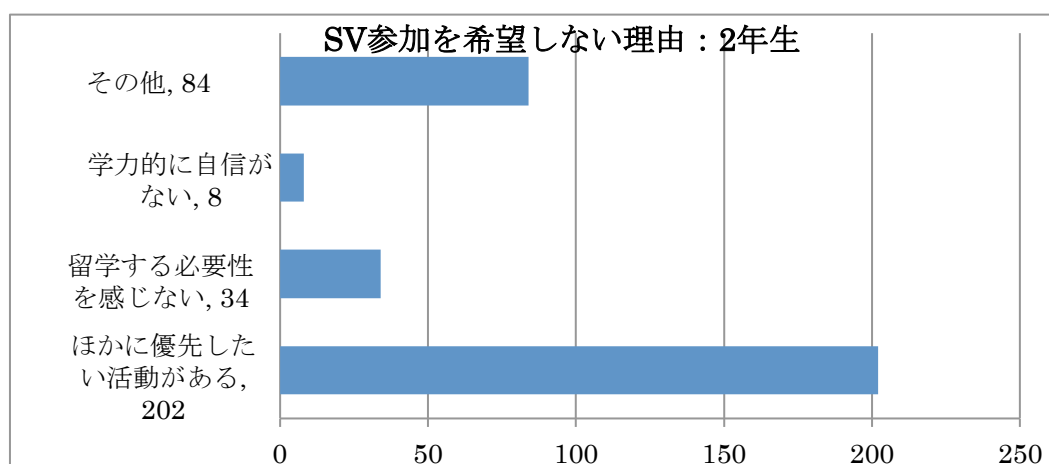
TUFS-SV 希望留学先について

TUFS-SV 留学を希望する学生は 282 名で、全体の 43%と、1 年生に比べ 26%少ない結果となっている。そのうち専攻地域・言語と関係する大学への留学を希望する学生は 185 名で TUFS-SV を希望する学生全体の 66%、英語圏への留学を希望する学生は 97 名で全学生の 34%であった。



TUFS-SV 参加を希望しない理由について

SV 留学を希望しない学生は 363 名いたが、そのうちの 55%にあたる 202 名が、ほかに優先したい活動があるためという理由を挙げている。学年が進むと、部活動やサークル等でも責任ある立場になることが多く、留学に行けない場合があると考えられる。



5. 参加者増加のための取り組み

この結果を踏まえ、本学では、より多くの学生に TUFSS-SV 留学を体験させるために、①単位を付与し、履修科目として留学を扱う、②期間や時期において柔軟性を持たせ、参加できるプログラムを拡大する、③広く TUFSS-SV の有益性をアピールし申請のサポートをする の3点に取り組んだ。3点についての詳細は以下のとおりである。

① 留学に対する単位の付与

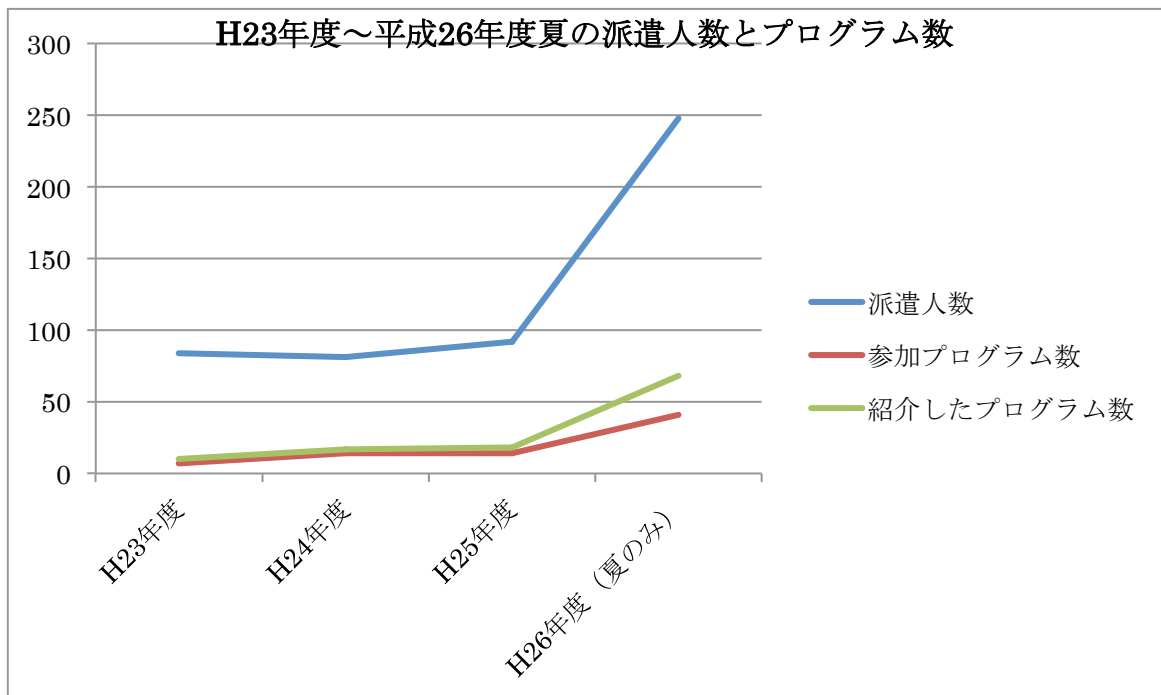
正楽、杉野、武は、大学生の海外留学に対する意識の形成要因について分析しているが、留学を促進する要因として、単位認定制度の充実度が影響を与えることを上げている(2013)。平成26年度、TUFSS-SV 留学をする学生は全員、通常科目と同様に履修登録をして留学をすることになり、2単位が付与されることとなった。また、トルコ語、ベトナム語、ビルマ語を専攻語とする学生(1年生)およびタイ語を専攻語とする2年生が全員夏のプログラムに参加するような形のプログラムも存在する。カリキュラムに組み込む、また履修登録をすることにより、単位認定を確実なものとし、留学をする学生を本学が把握できるという利点がある。また、前述の TUFSS-SV に関する意識調査では、ほかに優先したい活動があることが SV に参加しない理由として上げられていた。カリキュラムの一部、また履修科目として留学を考えることで、ほかに優先すべき活動があるとしても、周囲の理解を得られる可能性が高まるのではないかと考える。

② 参加プログラムの拡充

学生が参加できるプログラム数については年々増加傾向にあるが、平成26年度の参加プログラムは前年度の約3倍に増えている。

H23年度～平成26年度夏の派遣人数とプログラム数

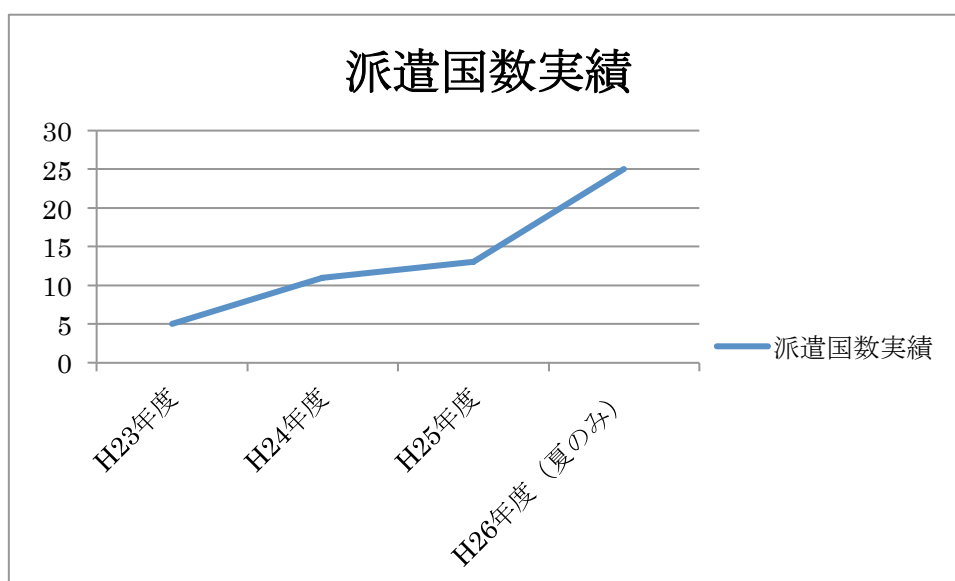
年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度 (夏のみ)
派遣人数	84	81	92	248
参加プログラム数	7	14	14	41
紹介したプログラム数	10	17	18	69



派遣国についても、国の数が多いほど参加人数が増えていることがわかる。

派遣国数実績と派遣人数

年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度 (夏のみ)
派遣国数実績	5	11	13	23
派遣人数	84	81	92	248



このように、派遣国数、プログラム数において大幅な拡充を行った結果、選択肢が増え、

派遣人数の伸びにつながっていると言える。また、派遣時期についても特別措置をとることにより柔軟性を持たせた。平成 25 年度までは、本学の学年暦に合わせて 7 月末から 9 月末までに行われるプログラムのみが派遣対象プログラムとなっていたが、平成 26 年度は、7 月の頭から 9 月末までを派遣期間に設定。授業期間の半ばである 7 月に留学をする学生に対しては、授業において試験を早めて実施する、追加課題を課すなどの特別措置を行うよう教員に周知し、対応を促した。留学できる期間が拡大し、これまで時期が合わなかった 7 月のプログラムに参加できるようになったことで、選択肢が広がり、派遣者数の増加につながった。また、学生によっては日本人学生の数が少ない留学先を希望する者もいる。日本人学生が多く参加する 8 月以外で参加できるプログラムを追加できたことで、学生の希望に合ったプログラムへの派遣が可能となった。また、通常のサマーコース(本学では英語で学ぶ総合型サマーコースとしている)のほとんどが 6, 7 月に行われるため、言語習得のみを目的としたコース以外にも学生を派遣できるようになった。

③ TUFSSV の広報と申請のサポート

野水 (2014) は、平成 23, 24 年度留学生交流支援制度 (短期派遣・SV) 追加アンケートの結果を分析しているが、その中で「十分なオリエンテーションを実施している」と感じている学生が、「自己能力評価が向上しており、明らかな効果が示されている」と述べている (2014)。正楽、杉野、武 (2013) によると、海外留学を促進するための要因として、奨学金情報の周知が挙げられている (2013)。これらの研究結果も踏まえ、オリエンテーションやウェブサイトでの告知を多く行ったことも今回の派遣学生数増加につながったのではないかと考える。

平成 26 年度の TUFSSV のための説明会は、平成 26 年 2 月に 2 度、行った。その際に、奨学金が出る可能性について述べ (実際に JASSO 奨学金受給の可能性が明らかになる直前) た。また、履修登録が 4 月であることを考慮し、早めにどのようなプログラムが考えられるかを発表し、TUFSSV への参加方法を明確にすることで、留学に必要な保護者への相談時間、検討期間を取ることができ、253 名の学生 (2 年生以上) が登録することとなった。新入生については、4 月初旬、TUFSSV 説明会を 2 度行った。本学のウェブサイト上、新入生の方向けのページには、TUFSSV についての詳細を入学前の早い段階から掲載し、保護者を含めた話し合いができるようにした。1 年生は当初 101 名希望を提出したため、全体では 354 名の学生が希望した。その後履修登録を実際に行った数が、前述の通りである。

説明会を行った後、オリエンテーションを 2 度行った。1 度目は、サマープログラムオリエンテーションと題し、留学前・留学後教育プログラムの概要について、提出書類について、各留学先への申請方法等について周知した。2 度目は、渡航前オリエンテーション

と称し、入国時に必要な書類、危機管理、留学前・留学後教育プログラムについて等、第1回目のオリエンテーションより詳細な内容を説明した。

6. 派遣先プログラムの内容

本学では、派遣プログラム数・国数をやみくもに増やすのではなく、以下の3つの分野にプログラムを分け、それぞれのプログラムの内容を教員により確認した上で派遣先に指定している。

① 各国言語コース

本学で専攻言語として教授している26言語(日本語を除く)すべてを入れることはできなかったが、できるだけ多くの言語が学べるように選択した。

② 英語コース

本学学生の英語力のレベルを考え、簡単すぎると思われるものは排除し、これまでの実績も踏まえた上で選択した。英語コースの中にも、ビジネス英語や学部での授業を並行して受講するものなどがある。

③ 英語で学ぶ総合型サマーコース

英語圏で行われている通常のサマーコースに加え、チェコのカレル大で行われているような、世界各国からの学生とともにあるテーマについて学ぶといった特色のあるコースも含んでいる。すべてかなり高度な英語力を必要とするが、短期留学で英語“を”学ぶのではなく、英語“で”学ぶことができるのは大きな利点であろう。

7月のプログラムに参加できるように派遣可能日程の調整を行ったことで、特に数が増えたプログラムは上記の③英語で学ぶ総合型サマーコースである。参加するためには高度な英語力が必要となることから、留学することを目標に英語力をさらに向上させられるような、意義深いプログラムである。残念ながら現在この種類のプログラムに参加する学生は多くないが、レベルの高さや講義の充実度から、ぜひ今後参加者を増やしていきたい。この種のプログラムは、学部留学を希望するが卒業時期を遅らせたくないといった学生の希望にかなうものであり、1, 2か月程度の短期間の留学であっても、派遣留学を含む学部留学と同じような経験が得られることは有益であると考える。

7. 留学前・留学後教育

H26年度からは、留学をするだけでなく、留学前、留学後に取り組むプログラムを作成することで、TUFUS-SV 留学に付加価値を付けた。この節では、本学が行っている留学前・留学後教育について詳細を述べる。

学習の可視化・多様化を指向した e-Learning 教育システムの開発と教育の高度化（平成 25 年度文部科学省 特別経費）の一部で、留学前後の教育プログラムを作成し、TUFS-SV に参加する学生はプログラム受講を必須にした。このプロジェクトは、学生の学習行動と修得度を可視化（指標化）するとともに学生の学習内容・学習形態の多様化や授業等、正規教育の手法の多様化に対応した次世代型の e-Learning 教育システムを開発することを目指している（東京外国語大学、2014）。このプロジェクト下で運営されている TUFS Moodle に、5つの留学に関するコースを作成した。これらのコースのうち、TUFS-SV 留学者は、以下の3つのコース（海外渡航における危機管理(留学前)、CEFR 診断(留学前・後)、留学体験報告書(留学後)）に取り組むことを必須としている。

① 海外渡航における危機管理：

安全でより良い海外旅行・留学をするために必要な危機管理についての情報をまとめている。映像を見てチェックテストに取り組み、理解度を確認する。映像教材とともに、ハンドブックも作成し、配布している。

② CEFR 診断：

CEFR とは、欧州評議会（Council of Europe）により 2001 年に公開された、Common European Framework of Reference for Languages（ヨーロッパ言語共通参照枠）の略。言語で「具体的に何が出来るか」を示した枠組みで、ABC 段階をさらに2分割した、6段階のレベルとなっている。今回作成した教材では、CEFR-J Version1.1 をディスクリプタとして使い、A1 レベルの下に PreA1 レベルを設定、7段階で診断する（投野(2013)）。この診断に留学前、留学後に取り組み、留学の成果（自己診断による）を確認する。CEFR の持つ多言語への汎用性を考えると、TUFS-SV のように数多くの言語を学ぶプログラムの成果を明らかにするために CEFR を導入するのは極めて自然な流れであろう。特にこの診断ができることに魅力を感じる学生は多い。診断結果の統計等を利用し、今後 SV 留学の有益性を考察するだけでなく、CEFR の応用研究にも寄与するのではないかと考える。

③ 留学体験報告：

オンラインで体験報告書を入力させ、学生自身の留学について深く考えるとともにこれから留学をする学生の参考となるようデータベース化する。この体験報告書は、留学先の評価や留学の目標とその達成度など数値化できるものの統計とともに、プログラムについての成果報告の一部を成す。

8. 危機管理

危機管理対策は、このような留学プログラムを推進する際に必須であり、特に重要な点

である。本学では、前述のオンライン教材に加え、「海外旅行・留学危機管理ハンドブック」および「緊急連絡カード」を作成し、留学をする学生に配布している。TUFS-SV 参加者には、海外旅行保険に加入することを条件としている。多くの国に派遣するプログラムであるため、派遣の可否については「外務省 海外安全ホームページ」内の「国・地域別の渡航情報（危険情報）」の内容により決定する。外務省の渡航情報の内容と、それに従う本学の基本的対応は以下の通りである（東京外国語大学、2014）。

外務省渡航情報と本学の基本的対応

外務省渡航情報(危険情報)	基本的対応
①「十分注意してください。」 その国・地域への渡航、滞在に当たって特別な注意が必要であることを示し、危険を避けるよう、勧めるもの。	実施または継続するが、十分な注意を払ってください。
②「渡航の是非を検討してください。」 その国・地域への渡航に関し、渡航の是非を含めた検討を真剣に行い、渡航する場合には、十分な安全措置を講じるよう勧めるもの。	延期・中止または帰国を検討してください。 (本学から指示があった場合はそれに従ってください。)
③「渡航の延期をお勧めします。」 その国・地域への渡航は、どのような目的であれ延期するよう勧めるもの。また、場合によっては、現地に滞在している日本人の方々に対して退避の可能性の検討や準備を促すメッセージを含むことがある。	中止または帰国してください。
④「退避を勧告します。渡航は延期してください。」 その国・地域に滞在している全ての日本人の方々に対して、滞在地から、安全な国・地域への退避（日本への帰国も含む）を勧告するもの。この状況では、当然のことながら新たな渡航は延期することが望まれる。	中止または即刻帰国してください。

9. 派遣学生による評価（平成 25 年度報告書から）

以上、TUFS-SV の特徴と現状について述べた。本節では、平成 25 年度に TUFS-SV に

参加した学生の体験報告書をもとに、プログラムの成果について分析する。

* **アイルランド国立大学コーク校**

- ・授業態度が改善され、より活発に発言できるようになった。
 - ・語学力だけではなく自分の意見を相手に伝える技術も必要だと感じた。

* **ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院**

- ・長期留学に行く前に、短期で留学するのがおすすめ

* **レジャイナ大学**

- ・一か月だけでも想像以上に英語力は向上する。
- ・宿題が多く授業も難しく、最初は大変だったが、先生が発言しやすい環境を作ってくれたので、間違いを気にせず発言できた。

* **サラマンカ大学**

- ・様々な国の友達ができ、英語の勉強にもなった。

* **ギーセン大学**

- ・様々な国からの留学生と交流できる

* **アンカラ大学**

- ・専攻語を学ぶに際し、現地の生活を体験することで自分の学びは大きく変わる。(到達度においてだけでなく、その語に対する見方や自分との距離感、今後の身の振り方など。) 専攻語を好きな人も、なかなか好きになれない人も、まずは現地で生活することを勧める。
- ・長期留学前に、1 か月の SV に行くことをお勧めする。たった 1 か月だが、現地で生活は長期留学 を考える際のよい判断材料となる。

* **国立台湾大学**

- ・自分の中国語が相手に通じた時などの喜びは大きく、今後の中国語学習の大きなモチベーションになった。

* **香港中文大学**

- ・文法・口語ともに授業の中身が非常に濃く、クラスメイトの中国語運用能力も高かった (HSK 5～6 級程度)。自らの中国語のレベルも確実に向上した。

* **延世大学**

- ・良い体験になるし、長期留学について考えるきっかけとなった。

* **ハノイ及びホーチミン国家大学・人文社会科学大学**

- ・ベトナム語の学習だけではなく、企業訪問などが組み込まれており充実した 3 週間だった。

* **モスクワ及びサンクトペテルブルク大学**

- ・ロシア語の勉強する動機づけになった
- ・百聞は一見にしかずということわざがありますが、このことわざはまさにロシアによく当てはまると思います。それくらいロシアは未知の世界で、知れば知るほど好きになってしまう、そんな国だと思います。
- ・短期のプログラムでも学べることはたくさんある。

***カリフォルニア大学サンディエゴ校**

- ・先生が日常でよく使われる単語や言い回しを多く教えてくれ、日本では学べない、いわゆる「本場の英語」に多く触れることができた。

平成 25 年度の TUFSSV 体験報告において、学生の立てた目標および派遣後の感想から分析すると、長期留学への準備として SV をとらえる傾向が明らかであり、野水 (2014) が指摘する通り、TUFSSV での海外経験が更なる語学力向上への動機づけとなっている。実際に、平成 23 年度から TUFSSV 留学を開始したが、その後派遣留学につながった本学学生は、平成 25 年末の時点で TUFSSV 参加者全体の 2 割となっている。

10. 今後の展望

TUFSSV をさらに発展させ、長期留学へつなげていくために、今後は以下のような取り組みを実行する。

① 専攻語として教授する 26 言語のプログラム開拓

現在は 17 言語学べるプログラムとなっているが、今後は以下の言語を学べるプログラムを増やしていきたい。

ポーランド語 (平成 26 年度春導入予定)、インドネシア語、フィリピン語、カンボジア語、ウルドゥー語、ヒンディー語、ベンガル語、アラビア語 (平成 26 年度春導入予定)、ペルシア語

協定校の中には、治安上、政治上の問題を抱えるものも存在するが、十分な協議を重ねて問題を解決しつつ、すべての学生に短期留学を体験させることを目指す。

② 学生のニーズに特化したプログラムの開発

協定校と協議し、既存の全員プログラム (タイ、ベトナム、トルコ、モスクワ、ラオス、ミャンマー) のようなプログラムをさらに増やしていきたい。

③ プログラム全体の質の向上

留学のみならず、現在行っている留学前、留学後教育をさらに充実させ、学生にとって実りの多い留学となるよう支援していく。

④ 留学の成果の発信

留学フェアや留学体験報告会を開催し、留学を経験した先輩の話聞くことで、自身の留学への参考にするとともに留学の成果を確認することができ、留学に対する抵抗感をなくすことを目的とする。経験談を聞くことで学習、留学への意欲を増長させる効果が期待できる。また、留学体験報告書の記入が単位認定に必須であるとし、体験報告書をデータベース化する。

結び

日本人学生の海外留学が停滞気味にあることが様々なメディアによって取り上げられて久しい今日、短期間であれ日本を離れ、異文化の中で勉に励み、また人々との交流を経験することには、今後の社会を担う人材育成の観点からも重要であろう。

一方で、「短期間で十分学べるのか」、「語学力は伸びるのか」等、疑問の声は、留学支援の現場において常に聞かれる。外国語が使えるようになるということは、言語自体の知識を獲得することだけではなく、それを活かすコミュニケーション能力の育成が望まれる。

本論は、東京外国語大学のSVの場合を検討するものであったが、H25年度の報告書から判断すると、学生は入学後半年で海外に派遣され学習経験を積むことが、専攻する言語に興味を持ち、大学生活4年間で専攻する言語にどう関わっていくかを考える良いきっかけになることが分かった。さらに、学年が上がるにつれて学生は、自身が学習してきた成果を確認し、将来のキャリアに繋がるような自信を持つことが確認された。

今後もSV制度のさらなる展開にむけて、学生一人ひとりのニーズを満たすことのできる新しいプログラムの開発と、その効果の成果を正確に評価する制度の構築が求められよう。

参考文献

東京外国語大学 (2013)平成 26 年度海外留学支援制度 (短期派遣)「Freshman Abroad Program - TUFUS から世界へ」「目的追求型夏期・春期学生派遣プログラム」計画書

正楽藍・杉野竜美・武寛子 (2013)「大学生の海外留学に対する意識の形成要因 — 日本の四年制大学における比較分析 —」香川大学インターナショナルオフィスジャーナル 第4号 2013年5月 : p.19-45

野水勉・新田功 (2014)「海外留学することの意義 — 平成 23, 24 年度留学生交流支援制度 (短期派遣・ショートビジット) 追加アンケート調査結果分析結果から」ウェブマガジン「留学交流」2014年7月号 : p.20-39

投野由紀夫編 (2013)「CAN-DO リスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR -J ガイドブック」、大修館書店

東京外国語大学 (2014) 「外務省渡航情報 (危険情報) とみなさんがとるべき対応について」海外旅行・留学危機管理ハンドブック : p.10-11

東京外国語大学 (2014) TUFUS Moodle2014 年度 <http://mdle.tufs.ac.jp/moodle/> (2014年7月30日アクセス)